

AL

NEWSLETTER

アクティブラーニングニュースレター

Volume 7, No. 3
December, 2021

～ 目次 ～

- ◆ アクティブラーニングニュースレター(p.1)
- ◆ アクティブラーニングとは？ (p.1)
- ◆ アクティブラーニング部門活動報告
 - ・ アクティブラーニング型授業モデルの開発 (p.1)
 - ・ ワークショップの開催(p.3)
- ◆ お知らせ
 - ・ 教養学部報 12月号に寄稿しました(p.5)
 - ・ オンライン授業でのアクティブラーニング手法の詳細について公開しています(p.5)
- ◆ アクティブラーニング部門とは？ (p.5)

◆ アクティブラーニングニュースレター

学習効果を高める方法の一つとしてアクティブラーニングがあります。アクティブラーニングはKALS（駒場アクティブラーニングスタジオ、東京大学 駒場キャンパス 17号館 2階）といった特別な設備があるところで行うこともありますが、通常の教室でも行えます。授業の一部にアクティブラーニングをとり入れる際に、参考になるように、本ニュースレターでアクティブラーニングのさまざまな方法や関連する話題をお知らせいたします。本ニュースレターをお読みになり、気になる記事がありましたら、アクティブラーニング部門までお問い合わせください。（星埜）

◆ アクティブラーニングとは？

アクティブラーニングとは、データ・情報・映像などのインプットを、読解・ライティング・討論を通じて分析・評価し、その成果を統合的にアウトプットする能動的な学習のことです。

講義でのインプットに対して、試験や課題でアウトプットすることは普段から行われていると思いますが、それだけで深い理解を獲得させるのはなかなか困難です。アクティブラーニングでは、その途中に読解・ライティング・討論など、学生が中心になって行う活動を取り入れることにより、より深い理解を獲得させるものです。一人で読んだ時は気がつ

かなかった観点を他の学生の見方から知ったり、他の学生の発表に質問することでより広がりをもって問題を捉えることができるようになります。

単に討論をすればアクティブラーニングになるわけではなく、どのように進めれば有効かについてさまざまな知見があります。このニュースレターでは、そのような方法をいくつか紹介していきます。（星埜）

◆ アクティブラーニング部門活動報告

2021年度のアクティブラーニング部門の活動について、これまでの取り組みを紹介します。

アクティブラーニング型授業モデルの開発

アクティブラーニング部門では、授業の開講を通して、アクティブラーニング型授業のモデル開発や試行を行っています。

2021年度Sセメスターは、4授業を開講しました。各授業の概要やアクティブラーニング型授業モデルについて得られた知見を簡単に紹介します。

(1) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習：SDGsを学べる授業をつくろう

昨年度に引き続いて開講しました。本授業では、授業の前半でSDGsの概要と授業設計理論を学びます。授業の後半では、高校生を対象としてSDGsについて学べる授業を行うという想定のもとで授業案を設計し、発表するという授業です。特に優れた授業案を作成したグループは、高校生に授業をするワークショップに登壇することができます。本授業では、授業設計を通じてSDGsについて学ぶことを目指しました。

学生に授業設計の演習がSDGsを理解するのに役立つかどうか尋ねたところ（とてもあてはまる～全くあてはまらないの5件法で14名が回答）、「とてもあてはまる」が13名、「ある程度あてはまる」が1名の回答があり、全員が役立ったと感じていました。また「他人に伝える、高校生に学んでもらうという立場に立つことで、アウトプットが必要になるので、より深い理解ができたと思う」や「インプットしたものを言葉や図で表現する過程で理解が曖昧だった部分を認識し、そこを重点的に学習できた」といった感想が履修者から得られました。

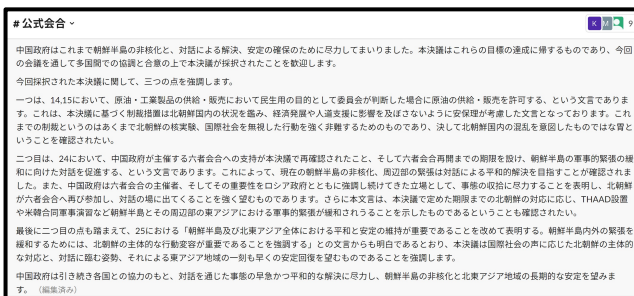
これらを踏まえると、授業設計を通じて学習内容の理解を深めるという授業モデルが有効と考えられます。授業をつくることで理解を深める方法は、ほかの学習内容でも適用できます。また、授業づくりまではいかずとも、人に説明する／教えることで内容の理解が深まることの重要性も本授業を通じて示すことができたのではと思います。

本授業で優れた授業案を設計した学生が高校生に授業するワークショップについては、本ニュースレター p. 3 に詳細を記載しています。ぜひご覧ください。（中澤）

(2)全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成 I

2019年度より開講している本授業では、「模擬国連 (Model United Nations)」というアクティブラーニングの手法を用いて、国際問題について考えました。多様な利害・価値観に配慮することの重要性を理解するには体感してみることが早道ですが、模擬国連の会議では、一人一人が米国政府代表や中国政府代表などの担当国になりきって国際問題について話し合います。立場を固定されている点ではディベートと同様です。しかし、相手を論破することで勝利を目指すディベートと異なり、模擬国連会議では合意形成が目的であるため相手の利害・価値観を尊重したうえでの妥協が重要になります。

この点を重視し、授業内では対立の激しい議題 (2003年のイラク戦争直前、2017年の朝鮮民主主義人民共和国による核実験時の国連安全保障理事会)・担当国を設定して、ロールプレイ・シミュレーションに取り組みました。具体的な授業の流れは、部門ウェブサイトをご覧ください (https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/classes/class-report/mun_semi_2021s_teacher/)。



公式発言の例 (Slack に議事録として残されます)

履修者の感想としては、次のものがありました。

- Policy Paper を準備する中で、公式会合の発言では出てこないようなより深い利害関係や、意図などをある程度汲み取ることができた。また、各国の態度は多いに国内情勢の影響・拘束を受けることがわかった。
- Policy Paper で問いがすでに立てられていて、またフローチャートみたいな形で授業が展開さ

れていて、参加している身としても授業の流れが非常にわかりやすかったです。

Policy Paper I ~「イタイコト」を見つけるために~

Country: _____ China
Name: _____

1 【内政】

(1) あなたの担当国には、大量破壊兵器やテロ、人権侵害に関して指摘されている事例があるか？

- ・ 人権侵害→共産党一党独裁体制を取っており、言論や思想の自由を大幅に制限しているとの指摘が国内外からある。異論を唱える人民のみならず、国内の少数民族などに対して深刻な人権侵害を行っているとのこと。
- ・ 大量破壊兵器→大量破壊というほどではないにしても、南シナ海での軍事行動など、周辺国に対して軍事的圧力をかけることが多い。制約にも関わらず NK が核実験を行えるのは China が決議通りの制裁を厳格に履行していないからだ国際社会に疑われている (石油については2013年以降ほぼ同量を供給し続ける)。
- ・ 直接(1)には関係ないが、~2008年の六者協議を主導していた実績あり。1

(2) (1)での回答を踏まえ、あなたの担当国は、国際社会の大量破壊兵器やテロ、人権侵害に関する関与・介入に対して、一般的にどのような姿勢を示すべきか。

- ・ 人権侵害については自国への非難を防ぐためになるべく言及しない。
- ・ 直接(2)には関係ないが、国際社会におけるプレゼンスを強めたがる

2 【外交政策】

(1) あなたの担当国は、これまでの DPRK 関連の会議において、どのような態度をとってきたか？

- ・ 北朝鮮への配慮=強力過ぎる制裁は行うべきでなく、対話路線強調 (「決議違反の連続でNKは対価を支払うべきだが、制裁・圧力は根本的解決にならない」)
- ・ 1・2回目は比較的緩い対応だったが、3回目以降は圧力強化

背景:

- (1) 2回目の核実験の際の経済制裁で、中国外交部は、「大量破壊兵器及びその運搬手段に断固反対し、安保理決議に厳格にしたがい、拡散防止と輸出規制のための法整備を行っている」と述べたに反し、湖北省の中国企業から兵器運搬車の車両が北朝

会議前に準備する Policy Paper の例

- 安心供与のような国際関係論の理論を使いつつ学べた。
- 自国にとってはあまり重要性の高くない国・地域の課題について、安保理におけるプレゼンスや大国との関係性を維持しながら関わる必要があることを学んだ。
- 五大国とそうでない国のどちらも経験したことで、国連安保理において様々な国がどういったモチベーションをもって臨んでいるのか少し体験できた。
- 交渉の中ではしばしば妥協することが必要となる。ゆえに、これ以上は譲ってはいけないというボトムラインを設定し、それを会議中も明確に意識することが重要だと学んだ。
- オンラインのため、対面での交渉に伴う緊張感のようなものを味わえなかった。言葉だけでなく、表情や仕草からも相手の意図を察知する経験が積みればなおよかった。

(中村)

(3)全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習: 働きがいやジェンダーを考える

「働きがいやジェンダーを考える」(担当教員: 星埜守之・伊勢坊綾)では、学生の興味関心に基づき、働きがい、働く上でのジェンダーの問題に関する論文や文献を輪読し、ディスカッションを行いました。本授業で扱う文献は、興味関心に沿って学生自ら選定し、教員と相談の上、決定しました。2021年度Sセメスターは、バーンアウト、男性性、セクシュアリティ、性的マイノリティ等の文献を取り扱

いました。履修者の多くが男性性に興味関心を持っていたことから、ジェンダー、男性性研究者である川口遼氏（東京都立大学子ども・若者貧困研究センター特任助教）に、『What Gender Studies Do』、『＜男性育休＞のポリティクス：男性性の視点から考える』というタイトルで、二度講演していただき、理解を深めました。

アクティブラーニングにおいて、思考の可視化、共有、外化が重要であることは、過去のニュースレターでも紹介した通りですが (<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2016/08/KOMEX-DALT-Newsletter-201210.pdf>)、オンライン環境でもそれを実現するために、Google ドキュメントを活用しました。各グループのディスカッション内容は、Google ドキュメント上で共有し、他のグループでどのような意見がでているのか、履修者全員が確認できます。この授業の目的は、自身と異なる考えを持つ他者から学び、自分の考えを発展させることであったため、いろいろな意見を知るという目的を果たすやり方の一つとして有効であったと考えられます。履修者は、授業中のディスカッション内容が記された Google ドキュメントの内容を見ながら、授業後の振り返りシートを記入します。授業中のディスカッションで自分が何を発言したか、明確に覚えていないこともあるので、ディスカッション記録が残ることは有意義だという学生の意見もありました。

思考の可視化、共有、外化のための Google ドキュメント活用は、オンライン環境だけに有益なものではなく、対面授業の場合でも活用できると考えられます。（伊勢坊）

(4) 全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習：「オープン教材」をつくらう！

本授業ではまず、オープンエデュケーションやオープン教材の定義や特徴、事例に加えて教材設計理論を学びます。その後、オープンエデュケーションやオープン教材について学べる教材を作り、オープンエデュケーションやオープン教材についての理解を深めるという授業です。つまり、「実際に教材をつくってみる」ことで、内容について自分なりの理解を深めるという授業方法を13回の授業全体で採用しました。個別の授業回では、大福帳やジグソー法などを取り入れました。オンライン授業での大福帳やジグソー法の導入などについては、部門ウェブサイトで紹介していますのでご覧ください (<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/tips/online/>)。

「教材づくりが、オープンエデュケーションへの理解を深めることに対して、役立った／役立たなかったか」についての履修者からの感想をいくつか紹介します。まず、「教材を作る上で内容に誤りがあったりはならないので、しっかり確認する必要があります、その点で理解が深まった」や「教材を作る中で、自らオープンエデュケーションの資料を探し、まとめなければならなかったため、そうしているうちに理解が深まりました」のように作成過程で内容

を調べることでより深く知ることができたという感想がありました。次に、「教材作りにおいて初めて学んだことを人に説明しなくてはならない立場になるのでもう一度学び直すきっかけになった」や「自分で作る際に復習することもあり、理解を深めることに役立ったと感じております」のように、教材作りが授業前半で扱ったオープンエデュケーションの内容を復習する機会となり、理解が深まったという感想が見られました。

ほかにも教材づくりが内容の理解に寄与していることが窺える感想が多数ありました。教材をつくることで学ぶという方法は、ほかの学習内容でも採用できますのでご参考になればと思います。（中澤）



学生が作成した教材の例

ワークショップの開催

学内外へのアクティブラーニングの普及を目指して定期的にワークショップを企画しています。

2021年度はこれまでに3つのワークショップを開催しました。これらについて簡単にご報告します。なお、詳細については、部門 web サイト (<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/event/>) をご覧ください。

ワークショップ「第2回東大生がつくるSDGsの授業」(2021年8月29日)

アクティブラーニング部門では、2021年度Sセメスターに、全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習「SDGsを学べる授業をつくらう」という授業を開講しました。本イベントは、その授業の中で特に優れた授業案を設計した学生たちが、高校生を対象とした授業を実施するもので、2020年度に続き、第2回目の開催となりました。新型コロナウイルスの流行状況を踏まえて、オンライン(Zoom)での開催でしたが、講師の学生たちは可能な限り双方向性を保つために、授業案を設計してイベントに臨みました。当日は、28名の高校生が参加し、次の2つの授業を行いました。

(1)SDGs全体を扱う授業「俯瞰してみるSDGs～17の目標間の関係性に迫る～」(吉田莉々 東京大学教養学部2年、黒瀬淳平 東京大学教養学部1年)

「俯瞰的に見るSDGs～17の目標間の関係性を考える～」では、SDGsの成立背景とその理念を念頭に置きながら、社会におけるSDGsの捉え方を考え

ました。SDGsは個別の目標が極めて真っ当なことを言っているが故に、それぞれの目標が17つ全体としてどの様に達成されるべきかという視点が抜けがちです。目標間のシナジーとトレードオフに着目することで、SDGsというある意味では「不完全な」ゴールを達成していく方法について取り扱いました。授業では、レクチャーに加えて、Jamboard等のオンライン教材を使用したブレイクアウトセッションを挟み、インプットとアウトプットのバランスを重視したスタイルにしました。

(2) 目標4(教育)を中心に扱う授業「隠された格差～『誰一人取り残さない』を考える～」(辻美波 東京大学教養学部2年、山本佳明 東京大学教養学部1年)

目標4が日本では達成済み扱いではあるものの、実はさまざまな面で格差が残っていることに高校生たちに気づいてほしいと思い、「隠された格差」というタイトルで授業を行いました。まず最初に、目標4の概要や意義、他のSDGsの目標とのつながりについて、チャット機能で発言してもらいながら確認しました。次に、ブレイクアウトルームに分かれて、自分たちの身近なところから、「質の高い教育」とは何か、そこから取り残されてしまう人はどのような人かを考えてもらいました。その後、話し合った内容をグループごとに発表し、考えを共有する時間を設けました。最後にはまとめを行い、気づいた身近な格差について高校生が考えをより深められるようにしました。

また、授業を行った学生に、参加者の反応はどのようなものであったか、そして授業を実施した感想を聞いてみました。その内容は部門ウェブサイトでご覧いただけます。<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/event-report/a3064/> (伊勢坊)

オンラインワークショップ「オンラインでこそアクティブラーニング：アクティブで双方向的な授業のヒント」(2021年9月8日)

東大で授業を担当されている先生方を対象に、オンラインワークショップ「オンラインでこそアクティブラーニング：アクティブで双方向的な授業のヒント」を開催しました。定員を超える方々の申込みがあり、当日は13名の方が参加されました。

本ワークショップでは、オンライン授業における学生の状況把握やコミュニケーションといった双方向性を保ち、授業をアクティブにするためのポイントや手法について理解すること、具体的な手法や研究知見を参考にしつつ、グループでのディスカッションやワークを通じて情報共有や課題解決を目指すことを目的としました。

趣旨説明の後、参加者はグループ(ブレイクアウトルーム)に分かれて互いの自己紹介とワークに取り組みました。ワークでは、教員と学生とのコミュニケーションや双方向性の確保に関する3つの課題への対処法について、参加者の経験やアイデアに基

づきGoogleスライドを使いながら議論しました。全体での共有の後、ミニレクチャではTPACK

(Technological Pedagogical Content Knowledge)の枠組みを紹介し、テクノロジーに関する知識だけでなく教育学的な知識も重要であることを確認しました。そして、ワーク2では、ジグソー法を使ってアクティブラーニングに関する教育学的な知識を学ぶことを伝え、各自が担当する資料を決めました。

休憩を挟んで後半は、ジグソー法を用いたワーク2を行いました。まず、アクティブラーニングの手法、アクティブラーニングに関連する理論や知見、授業運営のポイントの3つの資料のグループに分かれてエキスパート活動を行いました。その後、ワーク1のグループに戻ってジグソー活動を行い、ワーク1と同じ課題への対処法を検討しました。

チーム4: 教育関係		※このワークシートはワーク1とワーク2(ジグソー活動)で使います。議論内容・結果は、それぞれのタイミングの列に記入してください。	
課題	ワーク1での議論内容・結果	ワーク2での議論内容・結果 (ワーク1の内容に追加や新たな方法など)	
①学生が理解しているかどうか分からない	「分からない」という言葉が頻りに出てきた。	「分からない」という言葉が頻りに出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。	
②学生がしっかりと説明を聞いているのか、議論や議論に取り組みしているのかわからない	「分からない」という言葉が頻りに出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。	「分からない」という言葉が頻りに出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。	
③質問があるから聞いても学生からの反応がない	「分からない」という言葉が頻りに出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。	「分からない」という言葉が頻りに出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。	
④学生同士の関係性	「分からない」という言葉が頻りに出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。	「分からない」という言葉が頻りに出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。その理由を聞いてみると、授業の進め方が分からないという意見が出てきた。	

議論で使用したワークシート (Google スライド)

最後に全体で議論内容を共有し、オンライン授業と対面授業との接続やワークショップ全体のふり返りを行ってワークショップを終えました。

参加者からは、「同じ悩みを共有しているあらゆる分野の先生方とお話しできてよかったです」や「さまざまな先生が色々ご苦労されていることを知って孤独感からは解放されました」といったコメントがあり、本ワークショップが、オンライン授業で陥りやすい教員の孤独感の解消の一助となったと思われます。また、ワークショップそのものや内容が、授業デザインや授業改善、オンライン授業におけるアクティブラーニングの導入に役立つ可能性が示されました。一方で、グループワークでは参加者どうしの意見交換が非常に活発で、それゆえ、時間が足りないという感想も見られました。また、さらに実践的な内容を望む声もいくつか聞かれました。こうしたご意見は、今後のワークショップや情報発信の検討に役立てていきたいと思えます。(中澤)

第3回模擬国連ワークショップ(2021年9月12日)

本ワークショップは、先述の全学自由研究ゼミナール/高度教養特殊演習「模擬国連で学ぶ国際関係と合意形成」を踏まえて開催したものです。学内外の大学・高校教員を対象として2019年度から実施

しており、今回が3回目となりましたが、57名の参加者が画面越しに集いました。

ワークショップは2部構成としました。セッション1「模擬国連導入事例から学ぶ」では、模擬国連の概要と本学教養学部の授業への導入例について中村からお話した後、青山学院高等部での導入例について同校の室田大樹教諭からお話いただきました。高校・大学それぞれでの導入例を検討する趣旨でしたが、導入目的を明確化する必要があるという最重要の点は共通していることを再確認する機会となりました。

1.5. 高校での模擬国連の例(青山学院高等)

【どのような授業で導入したか】	【模擬国連を導入した目的】
<ul style="list-style-type: none"> ■高校3年生 ■男女共学でクラス授業(42人) ■必修「政治・経済」3単位 ■国際政治の学習において教室で実施 	<ul style="list-style-type: none"> ■価値や立場の多様性 ■その中での合意形成 →「なぜ世界は平和にならぬか」 「なぜ世界は協調できないのか」 国際的な事象の背後のメカニズムを

セッション1の様子(室田先生との対話)

セッション2「ロールプレイ導入事例から学ぶ」では、小山淑子先生(東洋大学国際学部准教授)から、演劇等を取り入れた模擬国連以外のロールプレイ手法についてご紹介いただきました。模擬国連はあくまでも手段であるため、授業の目的により適したロールプレイがあれば、それを学ぼうという趣旨でしたが、模擬国連との異同を意識した小山先生のお話のおかげで、模擬国連の特徴を改めて確認する機会ともなりました。

ロールプレイ実践例(1)

実践例	テーマ・実践内容	目的
1) ミニミニ・ロールプレイ ・「国際政治学Ⅱ」(40名履修) ・4~5名1組 ・所要時間:20分程度	・コンストラクティブゲーム(事例:オタク・プロセス) ・対立地帯の禁止をめぐり賛成派・反対派に役割を振り分け、双方の立場から議論を展開し相手側の説得を試みる。	・オンライン授業における学生同士の交流機会の創出。 ・国際政治の理論や抽象概念への関心喚起、および理論・概念の理解を促す。
2) ミニ・ロールプレイ ・「Intensive Program (Conflict Resolution)」(30名履修) ・4~5名1組 ・所要時間:20~40分	・移行期正義 ・ロールリバーサル法(役割交換)を用い、武力紛争後の社会における移行期正義の問題について賛成者・加害者双方の立場に立って検討する。	・移行期正義について、抽象概念の理解にとどまらず、自分自身や自身の家族などに問題を引き寄せ、自分事として考えることを促す。 ・参加者の感情によって立場を思考が固定化することを避ける。
3) ロール・プレイ ・「Introductory Seminar on Conflict Resolution and Social	・平和構築、社会革新 ・事前の講義、資料精読と議論にもとづいて紛争復讐地域における平和構築プログラムを策定す	・対外政策を実施する際の国内政策策定過程におけるステークホルダー、ネットワークホルダーの決定要因について理解を深める。

セッション2の様子(小山先生との対話)

参加者からは、「模擬国連の概要→模擬国連の複数の実践例→模擬国連以外のロールプレイ実践例」という構成について、模擬国連経験者・未経験者の双方にとって学びがあるとの肯定的評価を多くいただくことができました。一方、模擬国連導入のハードルを下げる工夫をより知りたいといった声もありましたので、次回以降はそうしたTipsを共有するセッションも設けたいと考えています。

当日の様子は、後日「東大TV」にて公開される予定です。ぜひご覧ください。(中村)

◆ お知らせ

教養学部報12月号に寄稿しました

教養学部報12月号に「オンライン授業のアクティブラーニング」を寄稿しました。2021年度Sセメスター開講の授業について、オンライン授業でのアクティブラーニング手法の導入や効果を紹介しています。ぜひご覧ください。

オンライン授業でのアクティブラーニング手法の詳細について公開しています

アクティブラーニング部門ウェブサイトでは、オンライン授業で活用可能なアクティブラーニング手法について、授業前の準備や授業中の運営といった具体的な手順などを紹介しています。また実際の導入を踏まえての感想や改善についても発信しています。ぜひご覧いただき、オンライン授業でのアクティブラーニングの参考になれば幸いです。

◆ 今後の活動予定

2021年度Aセメスターも授業を開講し、引き続きアクティブラーニング型授業モデルの検討・開発を行っています。また年度末に再びワークショップを開催する予定があります。オンライン授業や部門の活動に関する情報は、部門ウェブサイト(<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/>)で発信していきますので、ぜひご覧いただければと思います。ワークショップへの参加もお待ちしております。

◆ アクティブラーニング部門とは?

アクティブラーニング部門は学部教育を教育学の視点から支援することを目的として、2010年度に教養教育高度化機構に設置されました。その活動内容は、教養学部・情報学環・大学総合教育研究センターの共同プロジェクトとして2007-2009年度に実施された文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)「ICTを活用した新たな教養教育の実現・アクティブラーニングの深化による国際標準の授業モデル構築」を継承し、発展させています。また、全国の教育機関や教育関連の企業からの見学を受け入れており、アクティブラーニングの実施モデルとしての役割も果たしています。

(奥付)

- 発行年月日:2021年12月7日
- 発行:東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 附属教養教育高度化機構アクティブラーニング部門
星埜守之・中澤明子・伊勢坊綾・中村長史
- 連絡先:dalt@kals.c.u-tokyo.ac.jp
- Webサイト:<https://dalt.c.u-tokyo.ac.jp/>